



1983年頃

秋も近くなった 静かな夏の夜の事です。

1. 夜

すみれ色の空には、銀に輝く星が たくさん はめこまれていました。

その空の下を散歩している者がありました。

それは、さくら色のワンピースを着てダイヤモンドの指輪をはめた
おしゃれな人形と、ぼたんの花模様で黄緑色の着物を着た人形
でした。

私は、このふたりの人形の名前を知らないから、
おしゃれな人形を‘さくら’、着物を着た人形を‘ぼたん’と
呼ぶことにします。

人形たちの後をついていくと、ふたりは、魚屋さんの角を曲がり、
足音も立てずに歩いていきました。

さくらは、ぼたんの耳に口を近づけて なにか ぼそぼそと
言いましたが、何を言っているのかは 聞こえません。

そのうち、ふたりは何か見つけたらしく、立ち止まり、こそこそと
話し始めました。

「これ、なにかしら」

「あら、私、それ見たことある。えーっと・・・」

ぼたんが、大きな柿の木に寄りかかって、首をかしげます。

細い筒に紙が貼ってあって、絵や文字が書いてあります。
そして、筒の先には、赤や黄色のペラペラの紙がついています。

「あっ、思い出した。これ、花火よ」

「ああ、あれ・・・」

そうです。
花火が一本、道に落ちていたのです。

少し泥がついていますが、まだ使えそうです。

さくらとぼたんは、その花火を拾って また歩き出しました。

コツ、コツ、コツ・・・。

さくらの靴の音が静かに響きます。

ふたりが急に立ち止まったので、さくらのすぐ後ろを歩いていた
私は、ぶつかりそうになってしまいました。

ここは、空き地でした。

私は、さっき見つかかりそうになったので、大きなケヤキの木の陰に
隠れました。

ぼたんときくらの方を見ると、何か話し合っています。

どうやら、「花火を手にとって火をつけるのか、それとも地面に立てるのか」話し合っているようでした。

話し合いの結果、地面に立てることになったようでした。

私は、おかしくなりました。
あの花火は、手に持って楽しむものなのに……。

でも、次の瞬間には怖くなってきました。

もし爆発でもしたら……。

ぼたんがマッチを取り出して、さくらが花火を地面に立てました。

シュツ。 マッチを擦る音。

花火に火が着きました。

ポーン！！

爆発と思ったのは、大間違いでした。
とっても綺麗な花火です。

シュワシュワシュワ……。

「きれいね。」

「ほんと……。」

さくらもぼたんも花火に見とれています。

きっと、自分でやったのは初めてだったのでしょう。

シュワシュワ、パキパキ、スッポーン！！

花火は、素敵な模様を どんどん出します。

不思議なことに、この花火は 何時間経っても終わりません。

シュワシュワ、パキパキ、ポンポーン！！

本当に綺麗でした。

2. 夜明け

どのくらい経ったのでしょうか。

私は、花火に見とれて 時間も忘れていました。
あたりは、ほんのりと赤く色づいてきています。

いちばん早く目を覚ました鶏が、「こけこっこー」と啼いたとたん、
今まで パチパチと音をたてていた花模様が 一度にパッと消え、
まわりはしーんと静まりかえってしまいました。

夜の花……。

ある夜、人形が泥のついた花火を持って 空き地に行き、
火をつけて楽しむ。

そして、一番鶏が啼くと その花火は消えてしまう。

私は、このようなことを本で読みました。

今、私が見ていることは、‘それ’とそっくりなのです。

そんなことを考えている私に、さくらとぼたんが ゆっくりと
近づいてきました。

私は、気分が悪くなって、ケヤキの木につかまったまま、
それっきり わからなくなっていました。

次に私が目を覚ましたのは、お昼近くになってからでした。

自分の布団の中で。

私の机の上には、さくらとぼたんが、昨日の夜の花火の
燃えかすを持ち、立っていました。

いつのまにか。

あれは、夢ではなかったんだ……。